

1. 全体編

1-1. AI概要(1~3時限目)に関する学び

- 理解度
「理解できた」「どちらかといえば理解できた」が大半を占め、全体としてはAIの基礎的な仕組みや深層学習の概要などを大まかに理解できた学生が多いといえます。
一部では「AIが間違えるケース」「データの重要性」「画像認識・深層学習がどのように作られるか」などに興味をもった声が多く、AIに対する理解を深めたいという意欲が見られました。
- 難しく感じた内容
「深層学習とは何か」「学習の仕組みやAIが誤認する理由」など、AIの内側の仕組み(アルゴリズムやデータ構造)を扱う部分が難しいと感じる学生が多かったようです。
体験の面では「深層学習を体験(画像認識AIを作る)」や「AIが間違える理由を探るデモ」などが「どのように動いているのか分からない」という点で難易度が高かったと感じた学生が見られます。
- 興味をもった内容
「画像生成AI」や「チャット型AI」「深層学習の仕組み」など、実際に体験できる内容には特に関心が高いという結果でした。
「AIが自動で画像を作る」「入力に応じて返答する」など、いわゆる“わかりやすいAIの動き”に対して興味を示す学生が多かった印象です。

1-2. 考える・伝える(4~5時限目)に関する学び

- 「考える」ことに対する認識
 - 多くの学生は、もともと「考えること」を意識していたか、もしくは「どちらかと言うと意識していた」と回答しています。実際に授業を受けて、「より客観的に考えるとはどういうことか」「論理的に考えるとはどういうことか」という点に触れ、新たな視点を得たという意見が見られました。
 - 一部では「認識が変わらない」学生もあり、その理由としては「すでに自分なりに考え方を整理できていた」「考えることは普段からやっているので特に新しさを感じない」といった見解が挙げられました。
- 「伝える」ことに対する認識
 - 「単に発信するのではなく、主観や先入観を意識すること」「より正確に他人へ情報を伝えることの難しさ」について、あらためて学ぶ機会になったと感じた学生が多数いました。
 - 「先入観が入ってしまうと、曖昧なまま伝えてしまう」「正しく客観的に情報を整理してから伝える必要がある」といったコメントが散見され、今後のコミュニケーションへの意識が変化した様子が見えます。

1-3. AIの今後の活用・可能性

- AIの向き合い方の変化
 - 受講前後で比較すると、多くの学生が「積極的に使いたい」「どちらかと言うと使いたい」へと変化しており、講義を通じて「AIを自分の学習や将来の仕事に活用する可能性」を感じ始めたことがわかります。
 - もともと「AIに興味がある」学生も多かったですが、「学校の授業以外でもチャットGPTを活用していた」という回答も少なくありませんでした。
- 今後どのような活動に活用したいか
 - 「テスト勉強や課題に役立てる(問題を作成させる/説明を補足させるなど)」
 - 「料理のレシピやアイデアを出してもら」「画像生成や合成技術を活かして作品づくりをしたい」
 - 「相談事や文章作成など、普段のコミュニケーションの支援」
 - 「部活や趣味での創作(イラスト生成や資料作成)に使ってみたい」
 - など、AIを身近な生活のツールとして考える意見が多く、専攻分野を問わず「うまく使えば便利」という印象を持った学生が多いようです。

1-4. 全体から考えられる効果と今後の課題

- 学び・意識の変化
5時限にわたる講座を通じて、AIの基礎から活用事例までを体験することで「AIは難しいというより、身近に使えるツール」という認識を得た学生が多いです。また、「考える・伝える」授業を通じてAIの活用だけでなく、「自分の思考プロセスやコミュニケーションの在り方」を見直すきっかけになったと推察されます。
- より深い理解への課題
 - 「AIの仕組み」を深掘りするには時間が足りなかったと感じる学生が多く、より詳細な仕組みやアルゴリズムへの興味はあるものの、難易度が高いと感じた声もありました。
 - 実際のプログラミングやデータセットの構築など、さらに実践的な開発プロセスを体験する機会があると興味関心を維持できそう、という意見も見られました。

2. 学科別編

2-1. 工業化学

- 受講者数: 37名
- 学びや気づき
 - 深層学習や画像認識などの仕組みに強く興味を示す回答が目立ち、「科学分野でのAI活用」を視野に入れている学生が一定数いました。
 - 一方で「難しく感じた」という声も、「AIそのものがどうやって判断しているかイメージしづらい」という点で工業化学の学生も共通しているようです。
- 今後の活用・可能性
 - 「研究テーマのアイデア創出」「レポート作成支援」「データ分析」など、化学分野にとどまらず広く活用したい意見が見られました。

- チャット型AIを特に活用していきたいという学生が多く、学習補助ツールとしての活用意欲が高い印象です。

2-2. 建築

- 受講者数: 33名
- 学びや気づき
 - 画像生成AIへの興味が特に高く、建築パースや意匠のアイデアづくりに使えそうとの声が多く見られました。
 - 「AIは一方向的に回答を出すだけでなく、自分たちが設計する情報を正しく伝える必要がある」という気づきがあり、いわゆる「伝え方」に関して興味を持った学生も少なくない様子です。
- 今後の活用・可能性
 - 「図面や3Dモデル作成でのサポート」「アイデアスケッチの生成」「建材や構造の選定アドバイス」など、実務的にAIがどう使われているか興味を持っている学生が複数いた。
 - AIを「発想のヒント」にする姿勢が強く、デザイン志向の側面からも使い道を模索したいと考えているようです。

2-3. 機械

- 受講者数: 59名(最多)
- 学びや気づき
 - 「誤差や間違いの分析」「制御分野への応用」など、機械領域に直結する形でAIを活用する可能性を感じた学生が一定数いました。
 - ただし、5時限という短期集中の中で仕組みを深く知ることまでは難しかったという声もありました。
- 今後の活用・可能性
 - 「ロボット制御や製造ラインでの品質管理」「CADデータの最適化」など、機械分野ならではの実用例に興味を示す意見が複数見られました。
 - 学習面では、機械的な図面の修正やプログラミングにAIを取り入れることを試してみたい、という声も散見されました。

3. まとめ・提言

1. AIの基礎理解から応用へ繋げるステップ
今回の講座をきっかけに、AIに対するハードルが下がった学生が多数確認されました。特に「AI=自分たちの活動を支援するツール」と認識しはじめた学生が多いため、今後は学科や進路に合わせた具体的なAI活用事例の紹介や、演習機会(プログラミング実習やデータセット作成など)を増やすことで、さらに興味を引き出せると考えられます。
2. 学科ごとの強みと連携
 - 工業化学: データ分析・研究の文脈でのAI活用
 - 建築: 画像生成AIを活かした設計・デザインサポート

- 機械: 制御・製造等への機械学習やAI制御の応用
各学科それぞれ得意分野が異なるからこそ、学科横断の協力や情報交換が相互に刺激になる可能性があります。
3. 「考える」「伝える」への意識づけの継続
「思考の整理」「主観・客観の使い分け」「先入観を排し論理的にまとめる」といった内容は、AIを使う上でも重要ですが、普段の学習・将来の仕事でも必須となります。今後もレポートやプレゼンテーションなどで意図的に取り入れ、習慣化できるとさらなる効果が期待できます。